4. 吉田第１号窯発掘調査報告書

（表　紙）

愛知県知多郡大府町

吉田第一号窯発掘調査報告書

昭和44年3月

大府町教育委員会

序

文化遺産は、社会の歴史的な発展の中でも、国民の手で存続させ、受け継がれていかなければならないものである。

本町も、発展する都市経済の影響のもと、大きく地域変貌を遂げているが、失われていく文化財の保護を積極的に考えなければならない時点にきている。

そこで、大府町文化財保護委員会の要請によって、今回の発掘調査の実施となったわけであるが、幸いに古瓦の出土は、町民の関心を呼び、多大の成果をおさめた。

本書はその調査報告書であるが、各方面での活用を乞い願う次第である。

なお、調査にあたられら方々、協力された方々に謝意を表する。

昭和44年3月

大府町教育委員会

教育長　水野明治

目次

はしがき　—調査の経過—　……

1. 遺跡の位置　……

2. 窯の構造　……

3. 出土遺物　……

4. 吉田古窯の性格　……

挿図目次

第1図　遺跡位置図……

第2図　付近地形図……

第3図　窯構造図……

第4図　第1号窯出土遺物実測図　椀、瓦類……

第5図　〃　〃　軒平瓦類……

第6図　〃　〃　拓本　〃……

第7図　〃　〃　平瓦……

第8図　〃　〃　〃……

第9図　第2号窯　〃　椀類……

第10図　〃　〃　軒先瓦……

図版目次

第1　遺跡全景　(1)遺跡遠望……

(2)古窯全景……

第2　古窯構造　(1)遺物出土状態……

(2)窯内構造……

第3　出土遺物(1)　軒丸瓦・軒平瓦……

第4　出土遺物(2)　軒平瓦類……

第5　出土遺物(3)　軒平瓦類および山茶碗……

第6　出土遺物(4)　平瓦類……

1. 調査の経過

知多半島には全域にわたって中世窯業生産址としての古窯が千基以上存在するが、半島北部の知多郡大府町には現在までのところ、大府町吉田に存在する古窯数基しか判明していない。

ところで、この大府町は、名古屋市に隣接し、知多半島のつけ根に位置する低丘陵で囲まれた町であるが、他の大都市周辺地区と同様、宅地造成、道路建設等開発事業が近年著しくなってきている。特に古窯所在の吉田地区には、知多半島を縦断する知多中央道の大府インターチェンジが建設される予定であり、地域変貌は早晩、この地域におよぶことが想像されるに至った。そこで町教委では、町の文化財保護の立場から本古窯の発掘調査をおこない、古窯の保存を計画していくこととし、昭和43年8月、名古屋大学文学部考古学研究室楢崎彰一助教授、常滑市立陶芸研究所沢田由治両氏の指導のもと、大府中学校教員、生徒の協力を得て、調査を実施したのであるが、当初予想された単なる山茶椀焼成窯と異なり、瓦を主体とした瓦陶兼業の窯であることが判明し、尾張地方の古瓦について一資料を提供した。

今回の調査によって巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦が出土し、町民の古窯への関心も一度に高まり、埋蔵文化財保護への多大な成果を生みだしたわけであるが、調査にあたっては、次の諸氏のご尽力があったことを明らかにし、感謝の意を表わす次第である。

名古屋大学文学部考古学研究室諸氏

大府町文化財保護委員会委員諸氏

大府町立大府中学校教員・生徒諸氏

愛知県教委社会教育課柴垣勇夫氏

なお、本書の作成にあたっては、遺跡、遺物の実測を名古屋大学考古学研究室学生諸氏に、写真撮影を楢崎彰一氏、本文・製図を柴垣勇夫氏に担当していただいた。

(大府町教育委員会　野田光輝)

2. 遺跡の位置

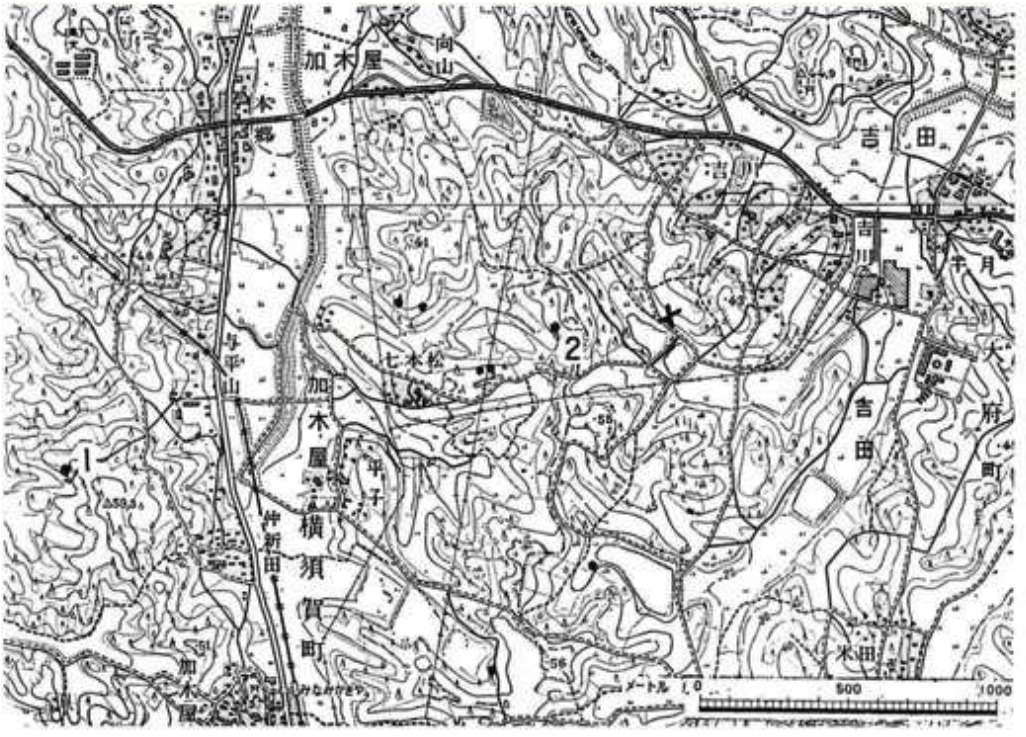
知多半島の丘陵地は、地質的に新三紀層に属し、その基部は鳴海・豊明の丘陵地帯へと続き、尾張丘陵の一部をなしている。

旧知多郡は、この半島基部の大高町（現・名古屋市緑区)、有松町（現・名古屋市緑区)、大府町を北端として知多半島全域を含むものであった。

ところで、知多半島北部から中央部にかけては、南北に走る2つの断層があって、半島北

部丘陵地を３分しており、東側の断層（大高・大府を結ぶ線で、現在東海道線が走っている）以東は、尾張丘陵へ連続する地形を示している。この断層より北東へ連続する丘陵には、やや離れて鳴海地区・折戸地区・黒笹地区等、猿投山西南麓古窯址群[①]の支群が分布し、地形的に東部断層以東に分布する古窯址は、猿投西南麓古窯址群[②]中に含められるものであって、大高・大府構造線より半島側の全域にわたって分布する古窯址が、知多古窯址群と呼ばれるものである。

本古窯は、この知多古窯址群中、最も北部に分布するものの一つであるが、名古屋環状線である国道155号線が、知多半島北部を縦断して大府町と横須賀町を走る中間点の南方600mに位置し、知多郡大府町大字吉田字惣左衛門池北10の１の地籍に属し、近世の溜池である惣左衛門池の北側の丘陵南斜面に築窯されていた。この丘陵は、上野町名和と半田市を結ぶ構造線の東に南北に連なる丘陵から派生した標高40～45mのもので、古窯址は、その南斜面の標高30mほどにあたる。



第１図　遺跡位置図（×印は吉田古窯・１は杜山古窯・２は権現山古窯）

① 松沢勲ほか『知多半島北部地質図』愛知県教育委員会　昭和37年

② 『全国遺跡地図（愛知県）』文化財保護委員会　昭和40年

③ 杉崎章、久永春男ほか『権現山古窯址』横須賀町立横須賀中学校　昭和40年

④ 楢崎彰一ほか「八巻古窯址群」愛知県教育委員会「知多古窯址群」　昭和37年

⑤ 加藤岩蔵「大原古窯址群」東浦町誌　昭和43年

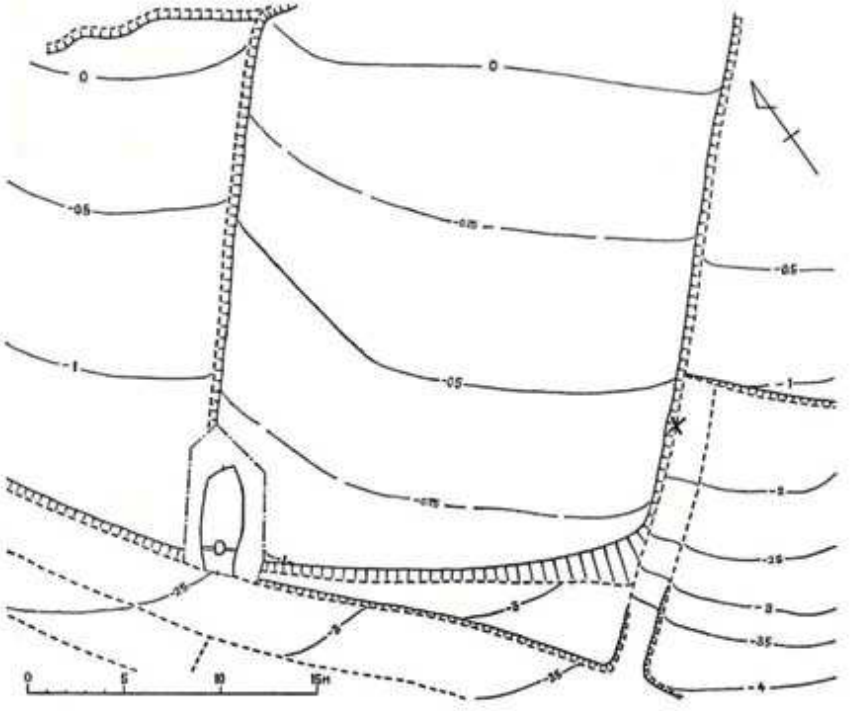
周辺は、古く畑地に開墾され、段々畑になっていたが、池に面する道路脇の崖面に分焔柱がのぞき、窯の存在が知られていた。調査前には、分焔孔の一方が開き、若干盗掘されていることを物語る状態であった。

なお、同一地番の畑地東側崖面には、別の古窯址（２号窯）の灰原が露出し、山茶椀類が採集され、当初は、１・２号窯とも単なる山茶椀窯と考えられていたのであるが、１号窯の調査によって瓦を主要生産品としていることが判明したため、あらためて２号窯の灰原遺物を表面採集したところ、本窯同様、軒丸瓦、平瓦が多数発見され、かつ鬼瓦の破片も採集されたのであった。

また、本古窯周辺には、第１図の如く、横須賀町地内に瓦生産窯として、社山古窯址、権現山古窯址、論田古窯址があり③、瓦供給地として、一時期盛んに築窯されていたことを物語っている。また本古窯の南部には、末期の灰釉陶器焼成窯や④、初期の山茶椀窯⑤が分布している。

3. 窯体の構造

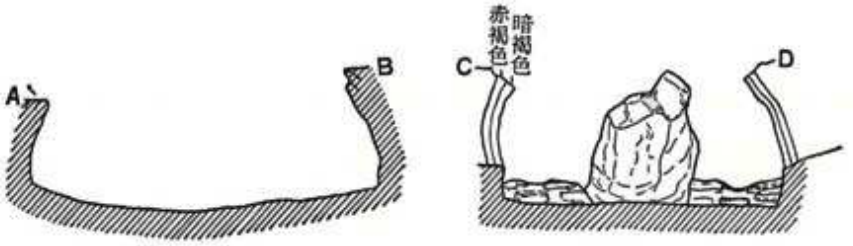
本古窯址は、低丘陵の南西斜面に築かれた分焔柱を持つ通有の窖窯であるが、焼成室上部以上は、畑の開墾ですでに破壊されており、また、焚き口部分以下は、町道によってやはり

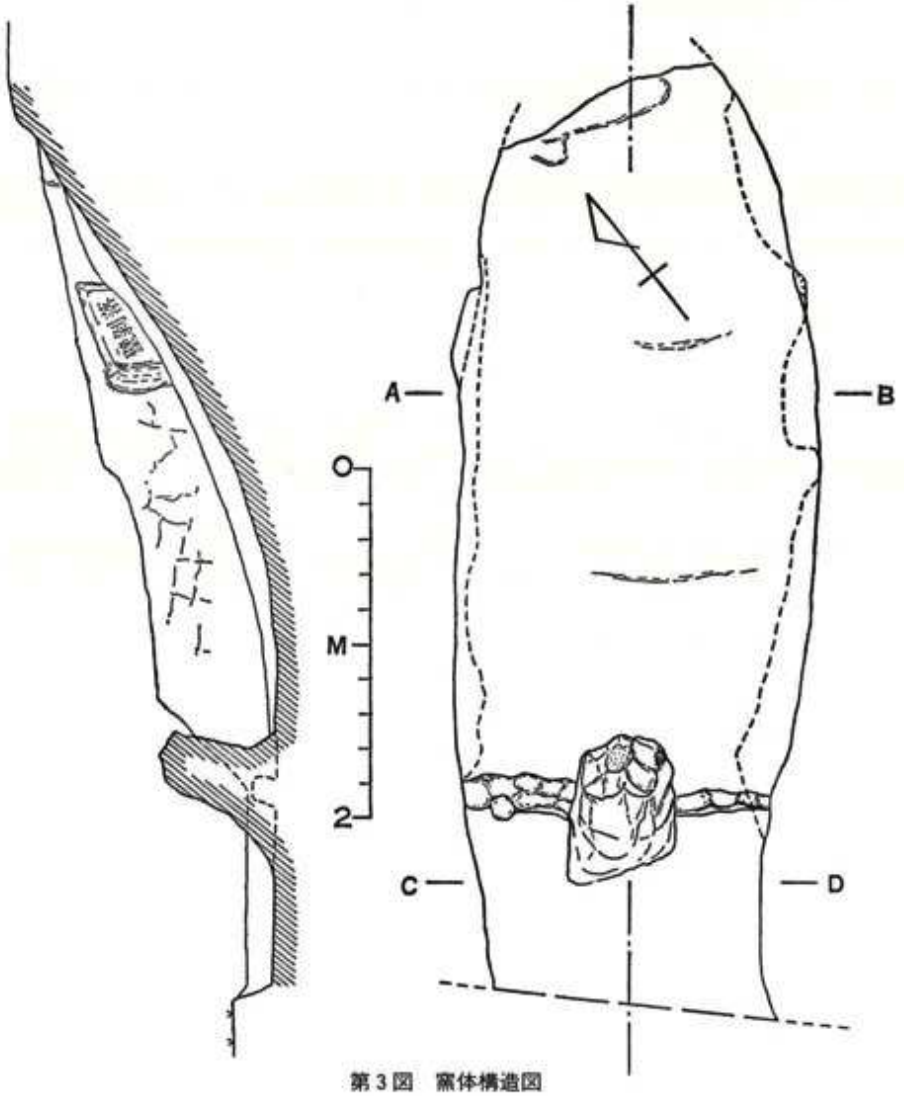


第２図　吉田古窯付近地形図

破壊されている状態であった(第2図)。灰原は、道路下に埋まっていると想像されるが、農道で、しかも砂利で固まっているため調査できなかった。

調査で知りえた古窯の規模等は、以下の通りである。(第3図)





第3図　窯体構造図

燃 焼 室

分焔柱の両側に間仕切障壁が設けられていることによって、焼成室と区別され、町道まで、長さ1.1m、巾は障壁部分で1.75m、道路端で1.5mを計る。焼成室の側壁は、かなり破壊され、調査地域南端では、痕跡をとどめるにすぎなかった。しかし、南端東側では巾が狭ばまり、焚き口部分の近いことを示していた。

床面は、赤褐色に焼けた地山の確認によって、ほぼ水平な状態で焼成室へ移行していた。なお、若干の灰層の堆積があったが、分焔柱付近で2～3cmを計ったにすぎない。

間仕切障壁は、径10cm強の円盤状粘土塊（焼台）を積みあげたもので、残存部は、左右とも高さ15～18cm、分焔柱に向かって左側の長さ60cm、右側の長さ55cmを計る。

分焔柱は、底部で短径55cm、長径75cmの不整円形のもので、残存高さは70cmである。地山が赤褐色に焼けている状態を露出させていて、築窯の際、柱を残して掘り進んだことを物語っていた。なお、分焔柱前（燃焼室側）より、山茶椀一個が出土した。

焼 成 室

床面は、間仕切障壁部分より、80cmほど水平に移行し、その後40cmが約7°の傾斜で登り、以後、角度を増し斜面中央で33°、残存最上部で30°の傾斜を持つものであった。焼成室残存部の長さは4m、巾は障壁から1.2mのところが最大で2.05m、最上部で1.25mを示し、焼成室全長は4.5m～5m前後の小型の窯であったことを想定させた。なお、床面は、地山の掘り込み面をそのまま使用していた。

側壁は中央部で残存高さ60cmを計る。壁面は全体に大きく剝落しているが、分焔柱付近や中央部に残る壁面から、5～8cmほどの粘土を貼りつけていたことが判った。

窯内では、焼成室下部の平坦部に馬爪形焼台、瓦等の遺物が散乱した状態で出土しており、瓦焼成中に何らかの事情で、廃棄された窯であることを示していた。

こうした、焼成室に約1mの平坦面をもち、30°以上の傾斜を持つ小規模な構造の窯は、知多古窯址群では八巻古窯址群①、猿投山西南麓古窯址群では、黒笹山茶椀5・6号窯②、東山55・61号窯③と類似する。これらは、初期山茶椀窯に位置づけられるものであるが、特に八巻古窯址群は、灰釉陶器を焼成している点で、平安末期に編年されているものである④。

①②③　楢崎彰一ほか『知多古窯址群』愛知県教育委員会　昭和36年、37年

④　楢崎彰一「中世窯業の成立と展開」『日本の考古学VI』（窯業）　昭和42年

4. 出土遺物

第１号窯の出土遺物は、窯内の上層から出土した山茶椀片十数点を除き、すべて床面に散乱していたものであり、焼成室下部からの出土品は、瓦片ばかりであった。

復元の結果は、下表の如き数量となった。(なお、２号窯灰層採集遺物も、比較参考のため、併記した。)

	瓦類							椀類	
	巴文軒丸瓦Ⅰ	同Ⅱ	唐草文軒平瓦Ⅰ	同Ⅱ	平瓦	丸瓦	鬼瓦	山茶椀	山皿
１号窯内床面	１ 枚	0	３ 枚	６枚	17枚	２片	0	１	0
２号窯灰層	0	３片	１ 片	0	20片	４片	１片	30片	20片

(1) １号窯遺物

椀　類　(第４図１～３)

燃焼室床面に伏せた状態で出土した椀（No.１）は径16.5cm、高5.2cmのもので、焼きも固く、器体下部に張りが若干認められる。口縁は、やや外反し、断面三角形の付高台を有する。

No.２、No.３は、共に窯内上層から出土したものであるが、No.２は、作りも丁寧で、焼も固く、付高台の高い椀である。No.３は、やや粗質な胎土で、底部の張りもなく、若干時代の下がるものである。

軒丸瓦　(第４図４)

瓦当部分は、内区に右まわり三巴文、外区に珠文24個をめぐらし、周縁は素縁で終るもので径14.8cm～15cmを計る（巴文軒丸瓦Ⅰ)。

男瓦部分は、径15cmの半円筒形を示し、末端は、長さ4.5cmの玉縁となり、径1.3cmの釘穴をもつ。筒内面は細かい布目痕が全面に認められるが、一部分、布目の上を刷毛で調整しており、周縁はヘラ仕上げをしている。筒上面には文様はなく、瓦当との接合部分は印籠づけによって接合されていた。

全長は、37.5cmである。

軒平瓦　(第５図、第６図)

瓦当部分は、長辺約27cm、短辺約5.5cmで、すべて唐草文を配しているが、均整に三反転させているようにみえる唐草のうち、右側部分に差があり、派生文が９条のもの（唐草文軒平瓦Ⅰ）と、８条のもの（唐草文軒平瓦Ⅱ）　とがある。出土９個のうち第Ⅰ類が３個（No.１、２、４)、第Ⅱ類が６個（No.３、５、６、７、８、９）であった。

女瓦部分の凹面は、全面に布目痕と、一部に刷毛目調整が認められ、周囲をヘラで整形している。凸面は、すべて無顎で、かつ無文である。厚さは、まちまちであるが、唐草文様の差に関係なく、ほぼ3分され、中央部で3.9cm～3.5cmの厚いもの3個（No.1、3、5）、3.0cm～2.6cmの中位のもの4個（No.2、4、6、8）、2.1cm～2.0cmの薄いもの2個（No.7、9）がある。これは、後述の平瓦の厚さに対応するようである。

瓦は、焼成中に窯が崩壊したためか、焼ひずみがひどく、復元しても割れ目に空間ができるものが多く、全長は、34.3cmから38.3cmまで計測されるが、もともと全長35cm前後、末端巾23cm前後に統一されていたものと思われる。なお、製作技法として、すべて、平瓦を折りまげて瓦当部分を作りつけていることが注意され、厚いものは、さらにもう一枚の平瓦を凸面に重ねていること（No.5）が割れ目から判った。

平　瓦　（第7図、第8図）

平面形は長方形をなし、長辺29～30cm前後、短辺20cm前後のもので、両面とも刷毛状のもので斜位に調整しているが、凹面には、桶状の模骨の痕跡（No.2、4）①が、凸面には、暖簾状の糸目痕が刷毛状痕の下に認められる。

凹面部は、短辺側の一方を斜めに切りおとし②、他方を篦で整形しているところから、斜めに切りおとした方が、軒先瓦側に連続するものと考えられる。

なお、厚さは、かなりの差があり、最大2.7cmから最小1.2cmまで計測されるが、これらは大略、次の如くに3分される。すなわち、2.7cmの最大のもの1個（No.1）、2.2cm～1.7cmのもの7個（No.2、3）、1.6cmから1.2cmのもの9個（No.4）で、さきの軒平瓦に対応するものと思われる。

丸　瓦　（第4図5）

長さ6.5cmの玉縁部分をもつ、15cmほどの破片であるが、軒丸瓦同様、筒内面に布目痕を残し、玉縁部分の中央に径1.2cmの釘穴をもつものである。なお、この破片の凸面は、平瓦と同様の糸目痕が認められる。

焼台は、58個しか出土しなかったが、瓦に純粋な完形品が一枚もないこと、壁面の剝落に比して、調査中に窯壁片の発見が少なかったから、おそらく、窯の崩壊後に、使用できる焼台、完形品は運びだされたものと思われる。

なお、瓦類は、多くが、常滑焼の壺・甕と同様、暗褐色または、暗灰色を呈している。

(2)第２号窯遺物

すべて灰原出土のものであるが、本１号窯と同種の瓦を焼成しているため、同時期の遺物として、以下に概略を記しておく。

椀　　（第９図１～５）

径16.5cm、高さ5.5cmを平均とするが、最大径18cmのものもある。器体下部に張りを持ち、口縁がやや外反するもので、断面三角形の高台をていねいに付し、糸痕を残している。

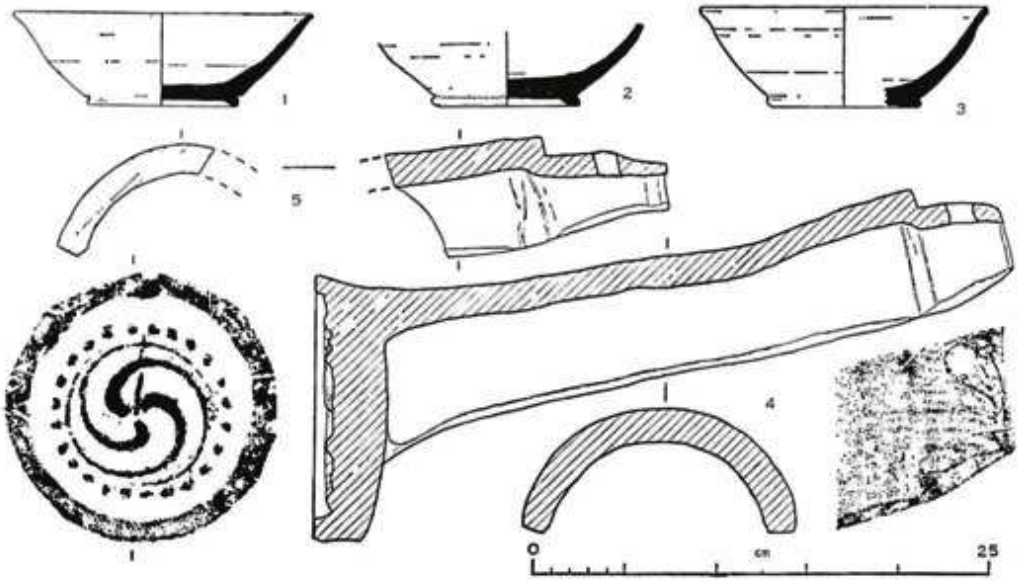
なお、No.５は、径15cm、高さ４cmで、やや浅いものであるが、作りは他と同様である。

小　皿　（第９図６～10）

１号窯では出土をみなかったものであるが、径9.5cm前後、高さ３cm～3.5cmで、器体下部に張りをもつ。口縁部はあまり外反せず、逆に椀の如く内反するもの（No.６）も認められる。高台は、採集した皿の底部にすべて付されており、山茶椀と共通する成形であった。

軒丸瓦　（第10図１、２）

瓦当部分のみの生焼けの破片であるが、３片とも左まわり三巴文の内区をもつものである。No.１は、径15.8cmを計り、珠文を26個めぐらしたものと想定される。No.２は、No.１よりやや小さく、珠文24個、径14.5cm前後が想定された。



第４図　巴文軒丸瓦および椀類

軒 平 瓦　（第10図３）

瓦当部分の生焼け小片１個であるが、唐草文第Ⅰ類を配し、巾5.5cmの無顎のもので、女瓦部分凹面に布目痕が認められるなど、１号窯とまったく同じものであることを示している。なお、１号窯同様、平瓦をおりまげて瓦当部分をつくりつけ、さらにもう一枚の平瓦を重ねていた。

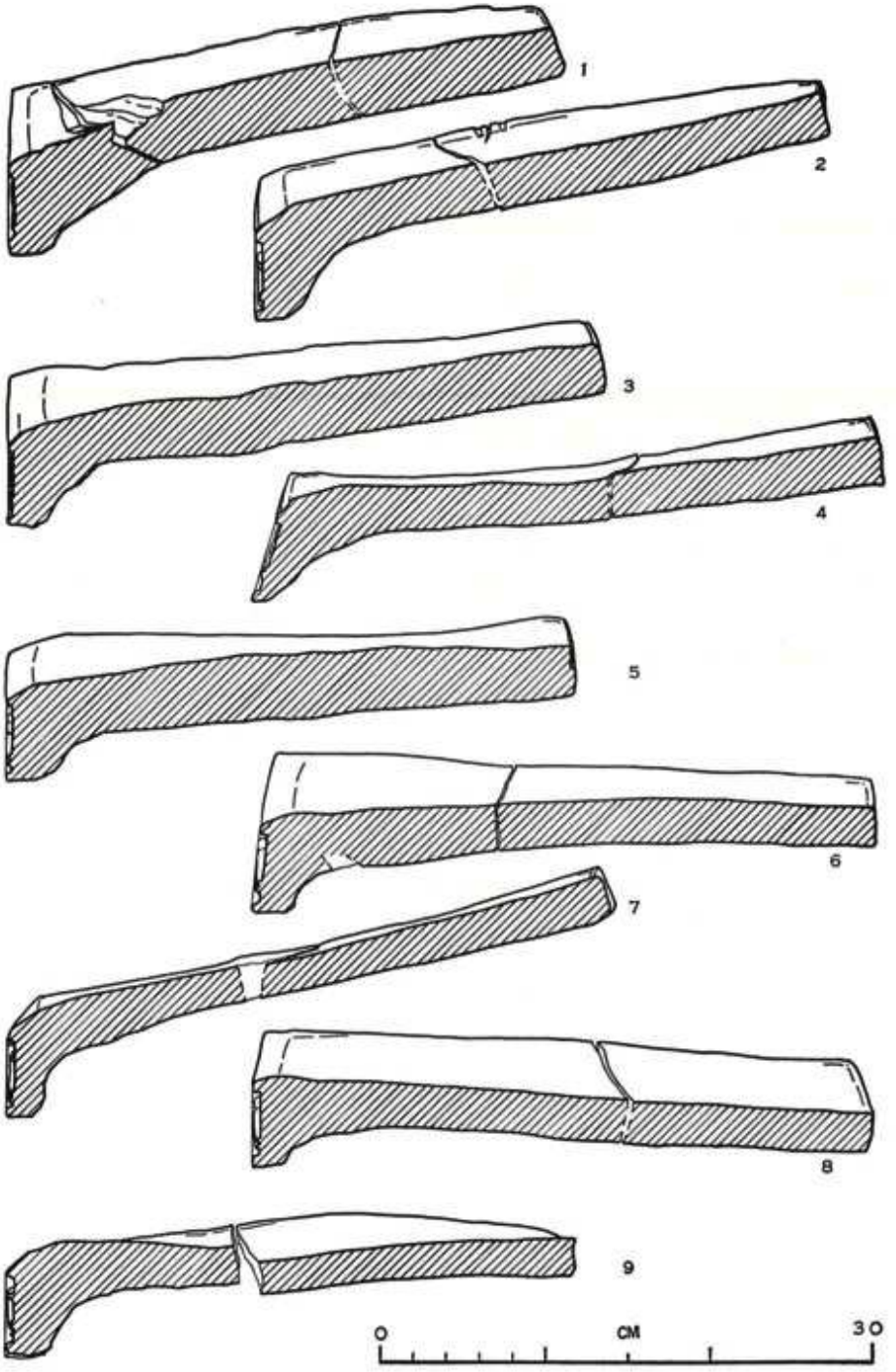
丸瓦・平瓦

小片のみで、記すべき特徴もないが、１号窯と同類のものと考えられる。すなわち、丸瓦片では釘穴をもつ玉縁部分が、平瓦では糸目痕を持つ厚さ２cm前後のものが採集されている。

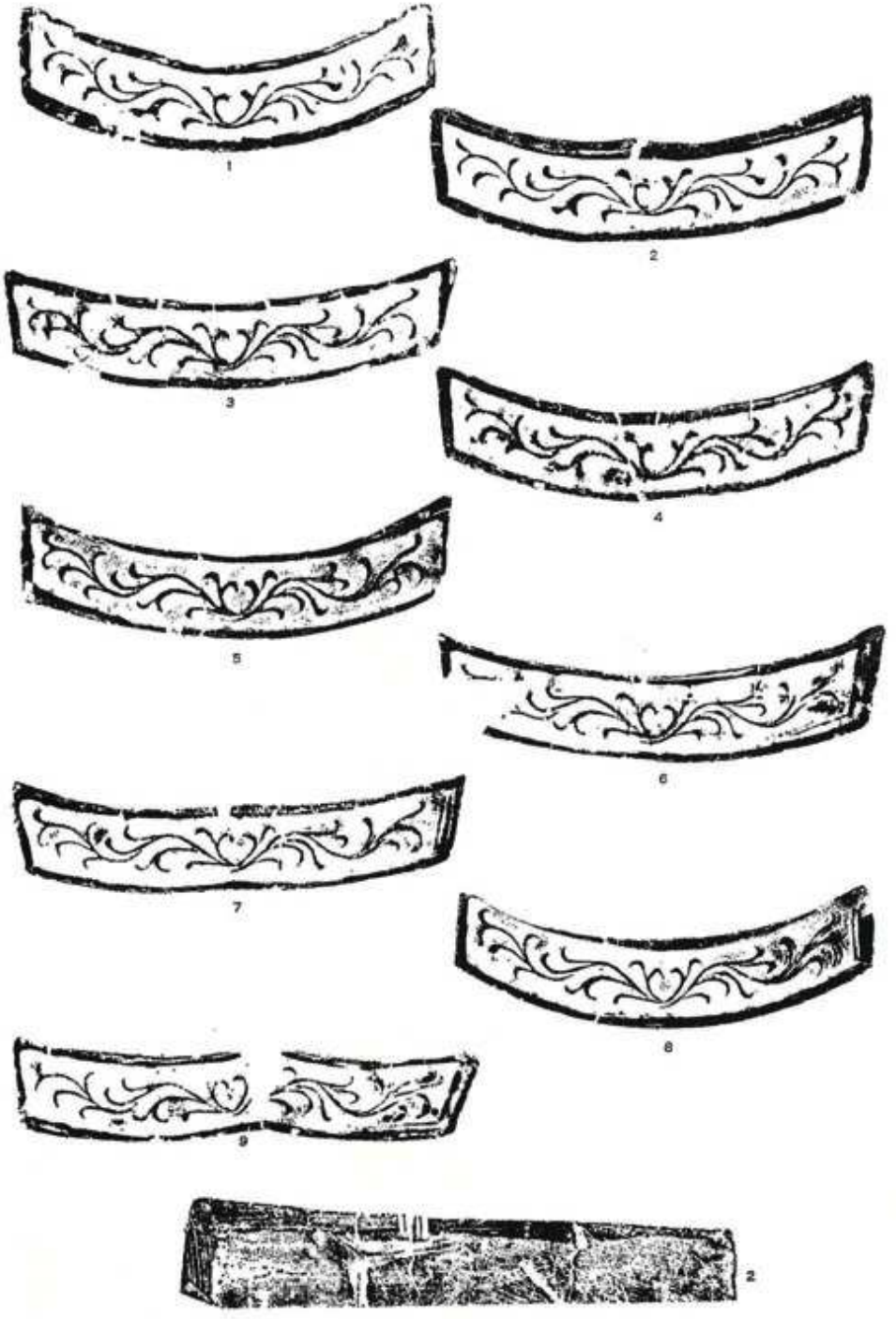
なお、鬼瓦は鼻の部分の破片で生焼けであった。

① 若干台形ぎみの平瓦であるが、短辺の上縁、下縁の差はせいぜい１cm前後で、奈良時代ほどの台形は呈しない。また、奈良時代の平瓦は、短かい縁が軒先につながるが、本窯の平瓦は、長い縁が、わざわざ斜めに切りおとしてあるため、逆に長い縁が軒先につながると思われる。

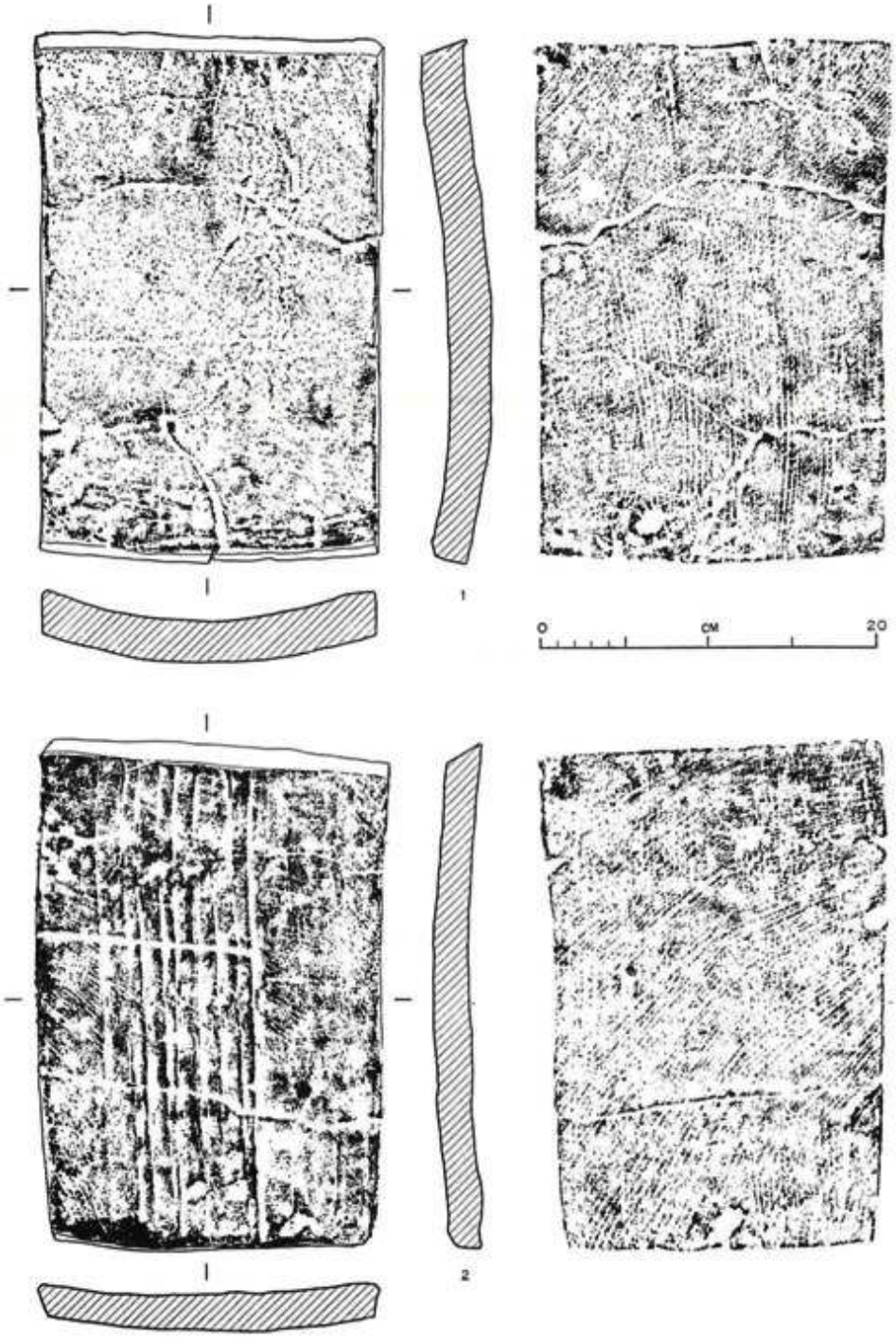
② 平瓦の断面図をみると、いずれも縁が垂直かまたは凸面の方へ切られているので、模骨との関連から、本窯では、一枚作りによって平瓦を製作していたとみられる。



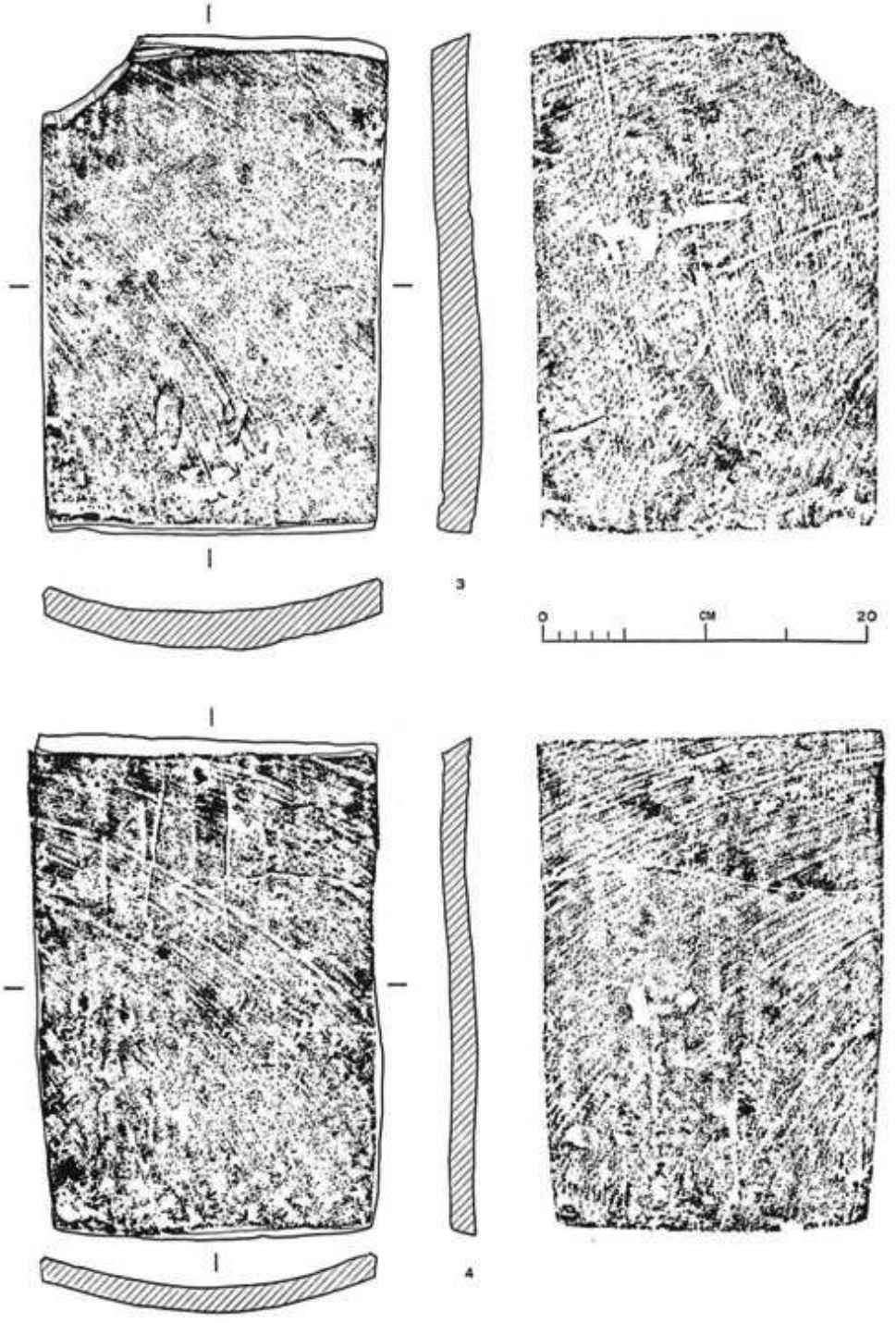
第5図　軒平瓦断面図(1、2、4が唐草文第Ⅰ類他は唐草文第Ⅱ類)



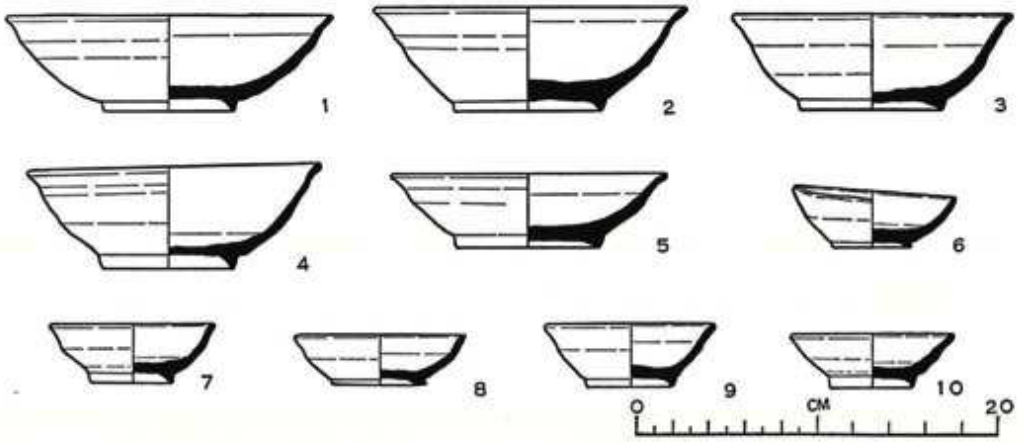
第6図　軒平瓦・瓦当拓本　縮尺1/4(図中の番号は第5図と対称する。なお最下端の(2)は図中(2)の平瓦の部で布目、へら削りが見られる)



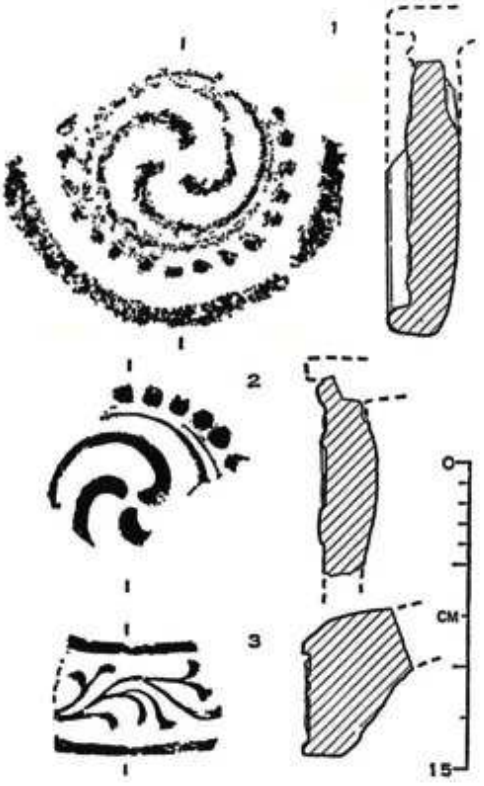
第7図　平瓦類拓本(1)　左側凸面、右側凹面



第8図　平瓦類拓本(2)　左側凸面、右側凹面



第９図　２号窯出土椀類（１～５、椀・６～10、小皿）



第10図　２号窯出土瓦類

5. 吉田古窯の性格

(1) 古窯構造について

1号窯の構造は、前述の如く猿投窯、知多古窯中の初期山茶椀窯の特徴をもつものであるが、特に側壁のみに粘土をはりつけている点は、分焔柱を持ち灰釉陶器焼成をおこなっていた折戸53号窯[①]に酷似し、灰釉陶器焼成窯が知多古窯址群に派生した時期[②]に近接して、これら初期山茶椀窯も知多半島北部に根をおろしたものと考えられる。

さて、本古窯の出土遺物と同様、瓦生産をおこなっていた近傍の古窯には、横須賀町加木屋地内の社山古窯址・権現山古窯址[③]があるが、これらとの比較を以下で考えてみよう。

社山古窯址においては、吉田1号窯と同じ笵を用いた右まわり三巴文軒丸瓦（巴文第Ⅰ類)、唐草文軒平瓦（唐草文第Ⅱ類）を出土していること、吉田古窯に比べ椀形態に若干時期の下がるものが出土していること等から、吉田古窯を築造した工人が、窯廃棄後、社山へ移動し、瓦生産のために窯構造を工夫していたものと思われる。さらに権現山古窯においては、床面に若干の類似はあるが、焼成室を広く（巾2.7m)、長い（6.5m）ものにしていることが、山茶椀の量産化を一層促進していく構造と解され、いわば、吉田1号窯の発展した形態と考えられるもので、築窯年代として社山古窯の次に位置づけられよう（なお、出土遺物から、窯使用期間は社山古窯と重複するものと思われる)。

本窯は、知多北部における瓦生産でも、このように初期に位置づけられるが、こうした初期山茶椀窯は、黒笹地区における黒笹山茶椀5・6号窯[④]、東山地区における東山55・61号窯[⑤]、瀬戸周辺における旭浄水場古窯[⑥]等の存在にみられるように、猿投窯周辺地区に一度に築窯されており、平安末期の荘園経済の発展に伴う日常雑器の急速な需要に応ずる供給体制が各地に芽ばえたことを示している。

(2) 軒先瓦について

次に本窯出土の三巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦等の生産は、どのような生産背景をもっていたのであろうか。

一つの手がかりは、唐草文軒平瓦第Ⅱ類が、京都市伏見区竹田の安楽寿院（鳥羽上皇によって1137年、鳥羽離宮東殿に建立された）から出土していることである。

すでに「権現山古窯址」報告書中、杉崎章、久永春男両氏によって社山古窯址[⑦]出土の唐草文軒平瓦が、安楽寿院出土のものと同型であることを指摘されているのであるが、本古窯もまた、安楽寿院への瓦供給地としての歴史的背景を持つことは、社山古窯址が本古窯の工人集団の移動と考えられる以上、当然のことであろう。

さらに、安楽寿院出土例中、左まわり三巴文軒丸瓦⑧は、珠文26個を想定させる長い巴文であるが、これは、２号窯出土巴文軒丸瓦第Ⅱ類(第10図№１)、および社山古窯址出土巴文軒丸瓦⑨と意匠が酷似しており、おそらく、唐草文軒平瓦とセットをなして当寺院へ搬入されたものと思われる。

久永春男氏は、前掲報告書中、社山古窯址所在地周辺の中世における荘園領主を考察され熱田神宮領であることを想定し、熱田社領とその本所であった院宮家との関係から社山古窯址での本瓦生産をA.D1189年から1192年の間に位置づけられたのであるが、この実年代に若干の異論を述べ、平安末期における窯業生産の様子を考察してみよう。

平安末期の院政政権下では、皇室もまた、律令制の崩壊とともに拡大されていく荘園制に依存する傾向を増し、専制君主としての力をなくしていくが、一方で院は摂関家の荘園を整理し、受領層の支持を得ることによって政権を維持させていたのである。こうした状況の中で、貴族階級の奢侈な生活は、末法思想とも関連しながら大土木工事を一時期さかんにさせた。特に白河・鳥羽院の時期に造立された六勝寺、鳥羽殿、白河殿は、その最たるものであった。⑩

これらの建物造営にあたっては、院に結びつく受領層が中心的にあたったのであるが、彼らは、国司の地位の成功、あるいは重任を院との結びつきにより確保し、国衛領を掌中にし財力を蓄えた階層であり、寺院等の建立に際しては、積極的な協力を示していた。例えば、六勝寺の一つである尊勝寺においては、創建時において、同一の建物に数種から十数種の文様のちがう瓦当がみられ、こうした瓦の不統一性は、成功、重任の受領層の請負工事による結果であると考えられ、かの安楽寿院（鳥羽殿の一部）においても同様であるといわれている。現に、尊勝寺出土巴文瓦の一種は、香川県綾歌郡綾南町陶邑から運ばれており⑪、安楽寿院へは、本例の如く、知多北部からの搬出、さらには鳥羽離宮南殿跡の瓦溜り出土瓦⑫と文様面で類似点をもつ軒平瓦を名古屋市昭和区八事裏山萱野古窯⑬から出土しており、いずれも12世紀初～12世紀中葉の建立当時使用されたと考えられ、本古窯⑭焼成の軒先瓦の実年代を1137年（安楽寿院五重塔落慶）～1156年（鳥羽法皇没）前後に求めることができるのである。

このことは、吉田古窯周辺を熱田社の荘園であったという前提に立つとしても、すでに摂関政治の段階に著しく増加した寄進地形荘園が、院政階段に院宮領に集中したものの一つとして熱田社と本所鳥羽院（安楽寿院）の関係が成立し、寺院建立に際し瓦が献納されたという見方のほかに、院政に結びつき自己の荘園を確保しつつある受領荘の位置からして受領(国司）を通じての瓦納入の可能性もひそんでいるのである。ちょうど時期を同じくして渥美半島東部において渥美半島古窯址群が成立した当時の三河守藤原顕長銘（在任1137～1155年）壺⑮にみられるように、伊勢神宮領と考えられる荘園内で、受領（国司）と自立化しつつある

在地領主の結びつきがかなり近密であったことと無関係ではないように思われる。

また一方、同時に焼成された12世紀前半から中葉代の山茶椀類の食品類の量産化は、現在のところその分布をさぐるまでに研究は進んでいないが、11世紀後半から12世紀はじめにかけ、すでに全国的に販路を広げつつあった灰釉陶器のあとを継ぎ、10世紀以後の農村経済の発展を背景に自立化をみせる在地領主層から各地へ搬出されたものと思われる。[16]

次に吉田古窯周辺における軒先瓦の生産は、かって杉崎章氏等によって集成されたのであるが、この業績に立脚して特に巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦をセットとして焼成していた古窯について、若干の考察をしてみよう。[17]

巴文・唐草文のセットを出土した古窯は、以下の6基である。

このうち古窯構造の判明しているものは、吉田1号窯、社山古窯、東山61号窯、塩狭間1号窯の4基であるが、内、吉田1号窯、東山61号窯は構造、出土品共に類似し、ほぼ同時期と解され、社山古窯は前述の如く吉田1号窯に近接する時期に位置づけられる。[18][19][20]

名称	所在地	巴文軒丸瓦				唐草文軒平瓦	
		内区	巴文径	外区珠文	面径	長さ	厚さ
東山61号窯	名古屋市昭和区天白町八事	右三巴	1.5cm	30個	16cm	28cm	6cm
吉田1号窯	知多郡大府町吉田	右三巴	8.0	24	15	27	5.5
吉田2号窯	〃	左三巴	8.0～8.5	24～26	14.5～15.8	—	5.5
社山古窯	知多郡横須賀町加木屋	左右三巴	8.0～8.5	24～26	15	27	5.5
萱野古窯	名古屋市昭和区天白町八事	左右三巴	—	0～28	—	—	—
塩狭間1号窯	東加茂郡足助町細田	左三巴	8.0	18(9対)	13.5	—	4.5

萱野古窯については、窯構造が知られないが、鳥羽離宮出土瓦との比較において、12世紀中葉に位置づけられる。塩狭間古窯については、調査者岩野見司氏によれば、椀類の形式化がめだち、鎌倉時代後半へ下がるものと考えられている。[19][20]

なお、名古屋市千種区田代町瓶杁3号窯では、軒平瓦の出土はないが、右まわり三巴文軒丸瓦（珠文20個、巴部分径7.5cm、面径13.8cm）と椀類が伴出しており、椀類の型式から鎌倉時代へ下げられよう。[21]

こうした窯構造、伴出品等から大よその編年を組みたてた上で、あらためて瓦当文様を見ると、次のような特徴の変遷を読みとることができる。まず、三巴文軒丸瓦においては、全

体に大型から小型へ、特に巴文の縮小化と珠文数の減少が目につく。すなわち、Ⅰ．珠文30個、径16cmの大型のもの（東山61号窯）、Ⅱ．珠文24～26個、径14.5～15cmの中型のもの（吉田古窯、社山古窯）、Ⅲ．珠文20個以下、径13.5cmの小型のもの（瓶杁３号窯、塩狭間１号窯）に分けられる。

次に草文軒平瓦においては、種々の形態をもつため、一がいに断定できないが、文様の形式化と小型化があげられよう。形式的には、全体に外区が素縁のみで均整唐草文のやや変形したものであるが、Ⅰ．唐草を大きく二反転させ、均整にしたもの（東山61号窯）、Ⅱ．ややなめらかに三反転させているが不均衡なもの（吉田古窯、社山古窯）や、形式化した唐草文を二反転させ均整にしたもの（萱野古窯）、Ⅲ．まったく形式化した唐草文が、破片ではっきりしないが、右へのびる扁行となっていると思われるもの（塩狭間古窯）に分類することができる。

Ⅰ・Ⅱは、共に平安末期のものであり、時間的な差はほとんど認められないが、巴文、唐草文のみでも、さまざまな文様変化をみせるところから、一方に多種多様な瓦文様を生みだしているものと考えられる。現に軒丸瓦における伝統的な蓮花文様が、社山古窯では吉田古窯との比較において、若干、時期が降ってあらわれることは、瓦当文様の多様性と同時にかなり型式変遷に錯綜した様子を見出だすことができる。[22]

しかし、鎌倉時代以後の瓦当文様では、巴文、唐草文が主流をなしている点から、そのセットの変遷をさぐることも無意味でなかろう。

以上、本古窯について、若干の考察をしてみたが、なお、日常雑器と瓦生産の関係、瓦製作技法等、提起される問題も多い。

① 楢崎彰一ほか「黒笹、折戸地区の調査」愛知県教育委員会『知多古窯址群』　昭和36年

② 楢崎彰一「中世窯業の成立と展開」『日本の考古学Ⅵ』　昭和42年

③ 杉崎章ほか「社山古窯」（「横須賀町の遺跡」昭和31年）および杉崎章、久永春男ほか『権現山古窯址』横須賀中学校　昭和40年

④ 註①に同じ

⑤ 楢崎彰一ほか「東山古窯址群」愛知県教育委員会『知多古窯址群』　昭和36年

⑥ 東春日井郡旭町新居所在の古窯で、昭和43年夏、愛知県教委の調査。調査者、宮石宗弘氏によれば、椀類の他に特殊耳皿、短頸壺を焼成した窯で、焼成室全長4.48m、最大巾2.28m、床傾斜30°、分焔柱をもち、側壁のみにはりつけ粘土がみられる。

⑦ 中村直勝「安楽寿院」京都府史蹟勝地調査会報告第６冊（大正14年３月）掲載図版中、24－５の軒平瓦

⑧ 註⑦報告書掲載図版中、23-３の軒丸瓦

⑨ 徳川美術館『東海の古陶―常滑・渥美展目録―』　昭和43年９月
同展出品目録中、№４掲載のもの

⑩ 林屋辰三郎「院政政権と武士団」東大出版会『古代国家の解体』　昭和30年

⑪ 奈良国立文化財研究所「尊勝寺発掘調査報告」『平城宮跡第一次発掘調査報告』　昭和36年

⑫ 『香川県陶邑古窯跡群調査報告』香川県教育委員会　昭和43年

⑬細谷義治「鳥羽離宮跡出土瓦の整理」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』　昭和43年
（軒平瓦整理番号Ｇ－４のものである）

⑭杉崎章「尾張における行基焼古窯址出土の古瓦」『権現山古窯址』昭和40年（萱野古窯では、数種の瓦当文を出土しているが、ここにいうのは、やや形式化した唐草文である。）

⑮小野田勝一「田原町大アラコ古窯址の調査」陶説145号　昭和40年

⑯楢崎彰一「瓷器の道(1)」名古屋大学文学部二十周年記念論集　昭和43年

⑰註⑭に同じ

⑱註③に同じ

⑲註⑤に同じ

⑳東加茂郡足助町細田所在の古窯で、昭和43年３月足助町誌編纂委員会によって調査された。調査者、岩野見司、天野暢保氏によれば、鎌倉時代後期の分焔柱をもつ全長8.5m、最大巾1.8m（焼成室長5.6m）25°傾斜の瓦陶兼業窯である。

㉑「瓶杁３号窯」東山工業高校創立５周年記念『研究紀要』Vol.１　昭和38年

㉒藤沢一夫「屋瓦の変遷」世界考古学大系４、　昭和36年

図　版

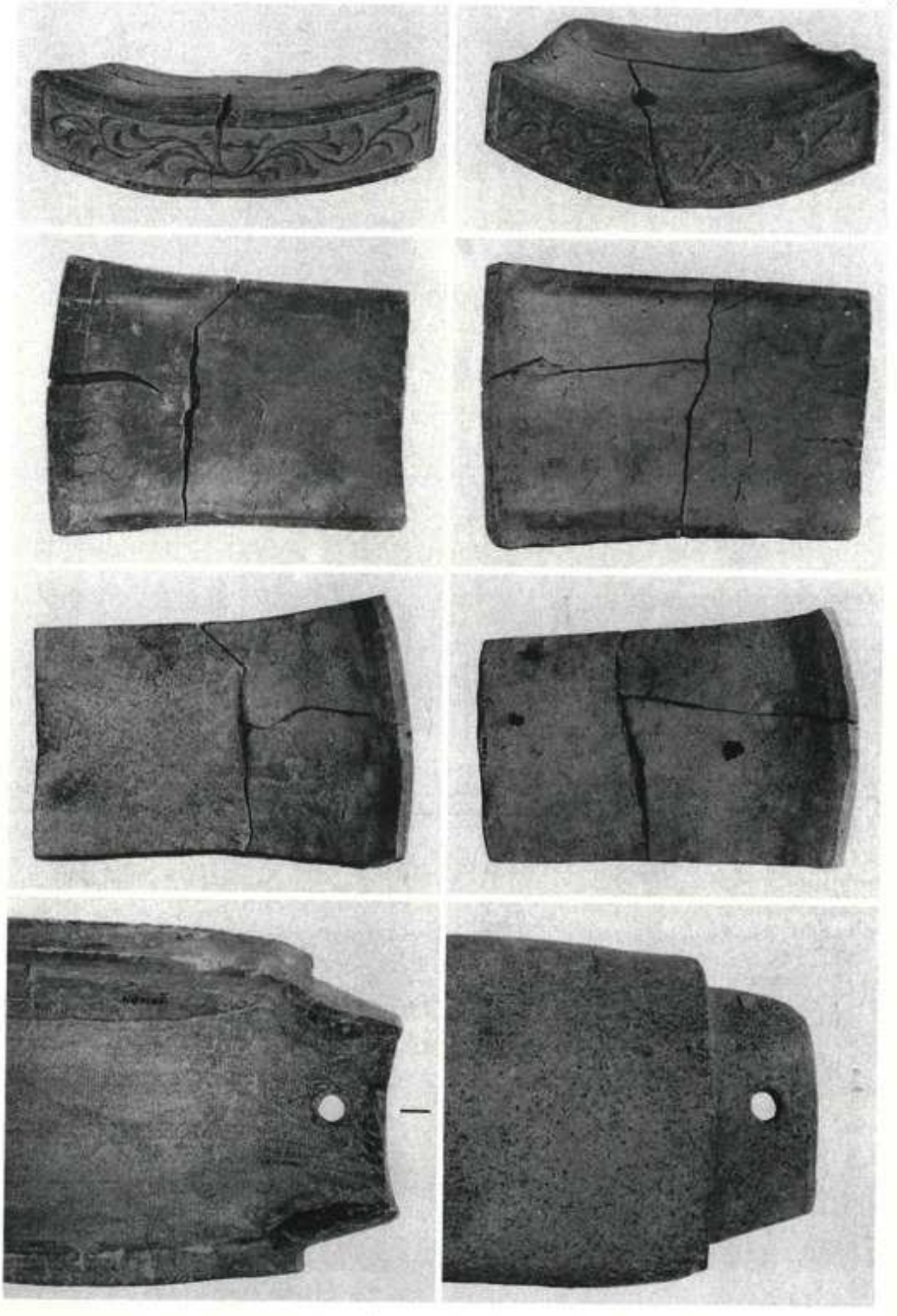
遺 跡 遠 望

古 窯 全 景

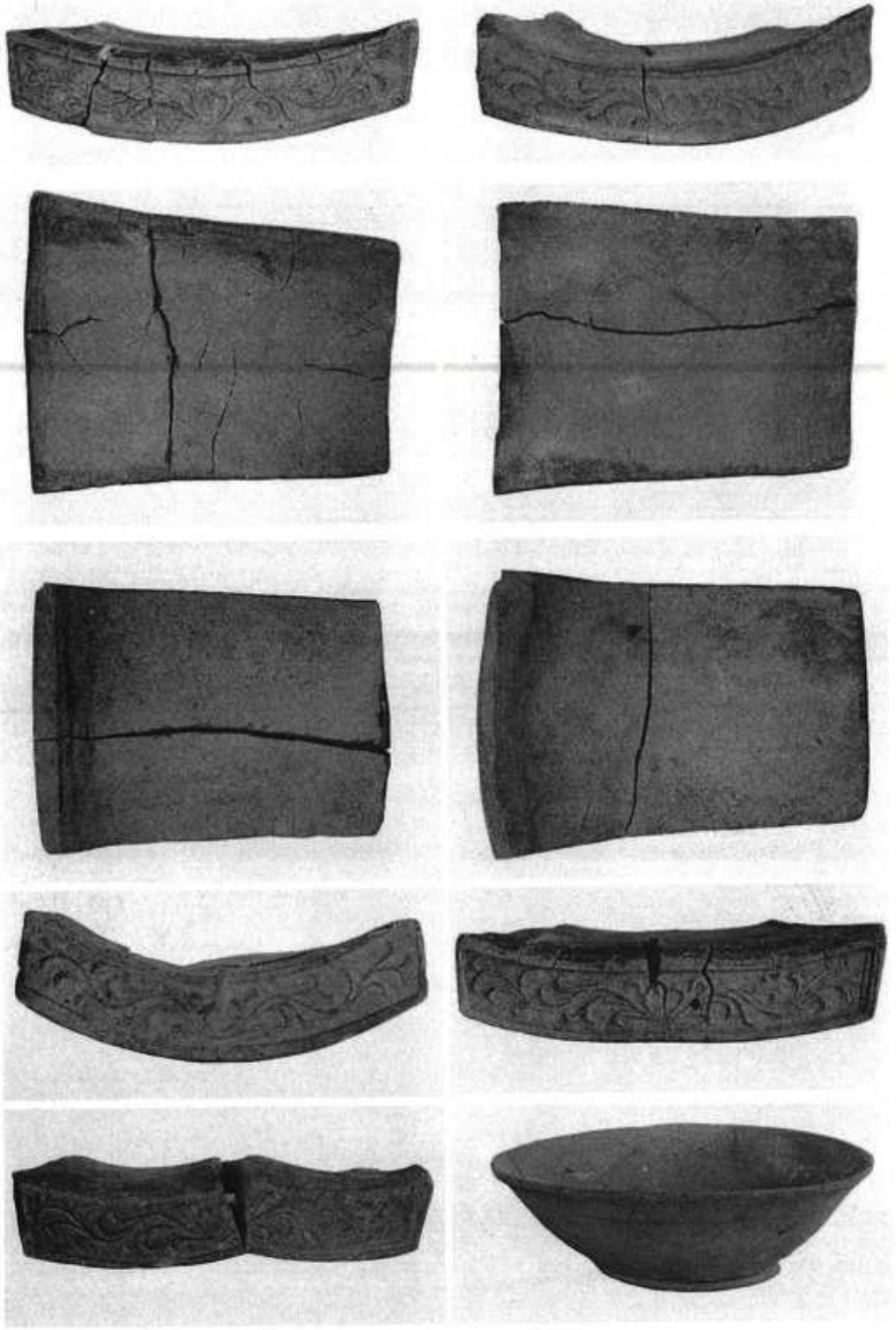
遺物出土状態

窯内構造

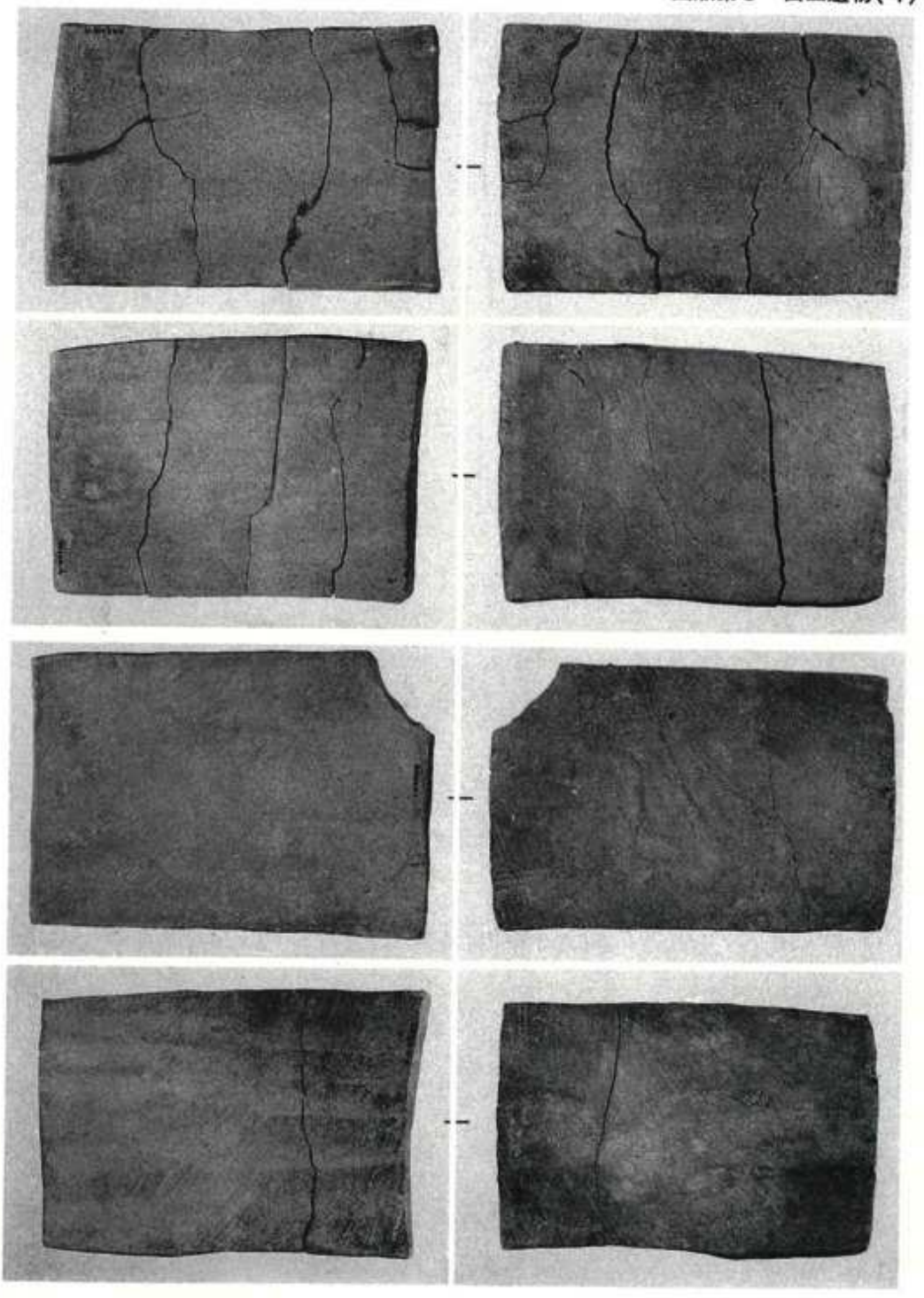
軒丸瓦・軒平瓦



軒平瓦類



軒平瓦類および山茶椀



平 瓦 類

昭和44年3月

吉田第一号窯発掘調査報告書

編集
発行　大府町教育委員会

印刷者　京都市下京区油小路仏光寺上ル
有限会社　真陽社